様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月３１日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010　～　2012
課題番号：２２６１５０２１
研究課題名（和文）多文化共生のデザイン:国際教育時代における留学生宿舎の建築学的研究

研究課題名（英文）　Design for the Diversity: Architectural Studies of Student Housing for International Education

研究代表者
鈴木在乃（SUZUKI ARNO）
京都大学・大学院理学研究科・講師
研究者番号：20467442

研究成果の概要（和文）：
国内外計50件の留学生宿舎提供を実地調査し、管理者および居住者への聞き取りを行い、現状および問題点を明らかにした。また留学生に対する質問紙調査および居室訪問調査においては、故郷での生活習慣の影響も若干見られたが、出身国よりも個人の就学・生活状況のほうが大きく住居選びに影響しており、留学生が日本の住環境によく適応していることがわかった。さらに日本人672名に対する質問紙調査の結果、多文化共生の経験者は少ないが、意識的には外国人とのシェアハウスは十分に可能であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：
We surveyed 50 international students housing in Japan and overseas, and accomplished case studies with interviews with the residents and managements. We also questioned 200 international students, and found that their housing choices were more determined by current situation than the influence from cultural background, and that they adapt Japanese lifestyle very well. By questionnaire survey with 672 Japanese people, we found that they would not discriminate foreigners when it comes to house-sharing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：デザイン学
科研費の分科・細目：
キーワード：留学生、集合住宅、国際化、民家、建築教育

１．　研究開始当初の背景

近代建築の世界的流布に始まり、人間・資本・情報の国際間流動が日常的となった現代に至るまで、異文化間の生活様式や生活習慣の差異は縮小する方向にあり、建築形態を含む居住環境もまた画一化に向かいつつある。国籍や宗教や生活習慣の異なる人々がともに学び、働き、集住するといった現象も進みつつあり、今後はこのような多文化共生に対応する住環境整備が必要である。

高等教育機関においても留学生数が急増し、国際間での誘致競争も活発化しているが、日本はその特殊な住宅賃貸習慣のため、留学生宿舎の提供が求められるという現実に直

面する。留学生宿舎は、異なる生活習慣を持つ住民が短期間で入れ替わりつつ集住するという極めて特殊な環境にも拘わらず、その特殊性が建築計画や設計の上に配慮されている例は非常に少ない。

学術研究においては、留学生 10 万人計画が発令された 1980 年代初頭より、建築学および地理学教育学等の人文社会科学分野におけるフィールドワーク的研究が多数報告されている。しかしこの間に留学生をとりまく社会環境は大きく変貌しており、現在では情報の大幅な更新が必要となっている。

1990 年代に筆者が米国で行った国際学生宿舎の事例研究においては、出身国や文化的背景の異なる住民が同じ設計の住戸の中でそれぞれに異なる文化を具現している様子が観察された。ところが 2008 年に完成した全面的再開発後に同住宅の住民に対して行った調査においては、留学生の生活習慣や経済力に大きな変化が見られ、学生宿舎に対する需要の変化と同時に、生活習慣における文化的多様性が失われていた。その要因についてはアジア圏の社会経済情勢の変化が考えられるが、確証は無い。

２．研究の目的

多文化共生の進む日本の高等教育機関において、キャンパスの国際化を図ることは急務である。本課題はそのための基礎資料を提供しようとするものであり、第一に留学生の生活および学習環境を質的に向上させ、第二に国際競争の中で低迷しつつある日本への留学生誘致を促進することを目的としている。その中で、過去のスクラップ＆ビルドへの反省も含めた現在の建築界の潮流にも配慮し、既存の建築リソースの活用や、日本の伝統的な住空間を活用する可能性についても検討する。つまりここでは画一的な「国際化」ではなく、ヴァナキュラーな「国際化」を念頭に置いている。

本課題はデザイン学を核に、都市計画学、住居学、教育学、経済学、心理学、精神保健学、景観工学等と連携した学際的研究により、留 学 生 の住環境を精査し、「文化的多様性を包容する環境デザインとは何か」を探ろうとするものである。具体的には、まずは宿舎提供および留学生の住環境について現状を詳しく把握し、次に留学生が日本の住環境やその中にある独特のデザインをどのように理解し受け入れているのかを把握する。さらに既存リソースの活用の可能性についても検討を加えた後、これらの情報を総合し、今後とるべき方針について考察することを目的とする。

３．研究の方法

日本全国の留学生宿舎の発展の経緯およびその問題点を明らかにするため、まず 1980 年から 2010 年までの 30 年間の既往研究を振り返った。一方、公開されている資料により全国の留学生宿舎の情報を隈無く集めて整理し、その中から特徴的あるいは代表的と思われた国内 40 件・国外 10 件の合計 50 件の留学生宿舎を訪問して現地調査を行い、管理者 45 名居住者 40 名から聞き取った。さらに実地調査で観察された国際宿舎の混住化傾向やコミュニティ重視傾向に着目し、日本人 672 名を対象としたアンケート調査を行い、多文化混住様式の発展の可能性について考察を加えた。

次に留学生の住宅嗜好とその背景を探るため、留学生 200 名を対象に、詳細なアンケート調査を行った。うち 129 名には、訪問実測と聞き取りを含む詳細な調査も行った。客観式回答のほうは全 6 頁の質問票で、１．回答者のプロフィール（全 10 問）、２．出身国での住宅と生活習慣（全 15 問）、３．日本における住居と生活習慣（全 30 問）、４．住宅を選ぶ際の重視事項（全 20 問）からなる。これらの回答を、EXCEL および SPSS を用い、単純集計、クロス集計、カイ二乗検定、因子分析および共分散構造分析を併せて検証し、特に留学生の過去における住居体験と現在の嗜好との相関関係を考察した。さらに、日本における留学生の最大多数（約 7 割）を占める中国出身の留学生を抽出した分析や、関西圏の国立大学留学生のみを抽出した分析も行い、それらのグループの特性を考察した。特に中国人に関しては、日本留学検討中の進学校の高校生 43 名および北京大学の学生 12 名についても類似の質問紙調査を実施し、参考にした。

またここまでの調査において観察された留学生の異文化環境理解や新しい環境への対応力の高さに着目し、日本で学ぶ留学生達が、「日本的な」住空間の本質的な意味や文脈を理解することが可能であるかどうかを検証した。ここでは 185 名の混合学生集団に対して行った自由描画・自由記述式のアンケート調査に基づき、日本人学生と留学生を比較し、何が理解の差を生むのかを分析した。

さらに異文化理解の促進による文化摩擦の解消および留学生誘致のための環境教育提案という視点から、日本の伝統的建築の活用の可能性について検討した。ここでは、日本の伝統的住宅の所有者 6 名への聞き取り調査と、日本人 563 名に対して既存リソース保存活用についての見解を尋ねるアンケート調査の結果を踏まえて考察した。

４．研究成果

先行研究の精査においては、留学生のための宿舎の現状と問題点を、文献資料および４年間かけた全 50 件の詳細な聞き取り調査により、明らかにした。そこでは、国際宿舎は大きく分けて国公立型と私立民間型に類型化されることがわかり、特に国公立型において時代の変化に対応できていない様子が観察された。さらに、最近の潮流として見聞された外国人・日本人混住型の国際宿舎の可能性を探るため、日本人 287 名のアンケート調査を行い、共同生活について、外国人との交流についての意識を確認した。その結果、共同生活にも外国人との交流にも経験を持つ人は少ないが、機会さえ与えればしてみてもよいと考えている人が多数を占めることがわかった。また集団生活の経験者の大半はその思い出を楽しかったと述べており、外国人に対しても差別意識はほとんど見当たらなかった。このように、今後も混住型の国際宿舎を提供していくことは、留学生と日本人学生の双方にとって利益のあることであることが予見できた。

留学生の住宅嗜好に関するアンケート調査においては、様々な手法の定量分析を行うことにより、留学生の住宅嗜好の重視項目因子間の相関関係が発見された（図１）。過去 30 年間の世界情勢の変化を受け、特に中国人留学生の、故郷での生活習慣が日本化・欧米化している様子もわかった（図２）。また最近の留学生は比較的柔軟性が高く、日本の住環境において、それぞれの工夫によって満足を持って生活している（図３）。また、国立大学と私立大学など、生活条件や経済状況の異なる留学生においては、その求める住環境（図４）が大きく異なることもわかった。

今回のアンケート調査においては、過去の住宅経験が住宅選びの重視事項に影響を与えていることが示唆されたが、実際の日本における生活容態に関しては出身地による大きな差異は見られず、特に若い独身の留学生が高い現地適応力を持っていることがわかった。たとえば単身者アパートの 76.8%で一口電気コンロの狭いキチネットしかないという状況にも拘らず多くの人が何らかの調理をしており、不満も聞かれないが、これは共有施設を上手に利用して切り抜けているのであった。そして共有施設における交流は、特に若い学生にとって寮生活の大きな魅力となっている。

生活習慣と住宅嗜好には相互関連があることもわかった。たとえば故郷で近所付き合いが多かった人と、掃除を頻繁にする人と、床座・床就寝をする人の相関については次のような推論が可能である。つまり、床座・床就寝には、床が清潔でなければならないので、掃除が必要となる。その代わり、狭い部屋に多数の来客を招いてくつろぐには合理的であるし、来客の多い人は掃除も頻繁にするであろう。近所付き合いの多さは住宅の開放性・閉鎖性とも関係する、すなわち開口部の大きさや日当りとも関連すると考えられた。

留学生と日本人の違いも非常に小さくなってきてはいるが、その中でも留学生ならではのいくつか特徴が捉えられた。まず自室の窓向きを知らない人が 19.2%もいたことは、南向きを重要視し住宅の価格や家賃にも反映する日本で生まれ育った人には考えにくい。自分が住んでいる部屋の床材を知らない人が 11.6%いたことも、日本人が全般的に木質系フローリングに拘っている現状と比較すれば外国人特有と言え、床に座らない文化から生まれる床との距離感であると考えられる。また 95%の留学生がシャワーしか使わない現状で、浴槽付きの日本のユニットバスが必要なのかは疑問であるが、日本人学生との混住を前提とした場合にはある程度必要かもしれない。　中国ではテーブル・椅子やベッド等の家具を使い、室内でも靴を履いたまま生活するのが伝統であったが、それも近年の高層マンションの出現や欧米化・日本化の中で変化しつつあり、現在では室内ではスリッパに履き替える人が大多数になっていることもわかった。それに伴い床座に対する抵抗も薄れてきているようで、日本の狭い部屋ではベッドや家具を放棄して狭い部屋を広く使ったり、あえて和室を選択したりといったことも行われている。家具付学生寮においても、家具を配置換えするなどして日本独特の狭さに対処していた。このように、日本に来る留学生は生活力が旺盛で、過保護な住宅はあまり歓迎されていないこともわかった。

住宅選びの重視事項においては、「静かさ」「プライバシー」など、生きていく為に必須とはいえない環境項目の重視が確認され、留学生の要求の大きな変化もわかった（図４）。以前と変わらず「家賃の安さ」に関心を示しているような回答も見えたが、現実に留学生が支払っている家賃は、関西における市場相場からして平均またはそれ以上の場合が多数であった。留学生の生活費や奨学金の額も、日本人大学生の仕送り全国平均額と比較して恵まれている。さらに、これまでは農村民や労働者階級が多く経済的に欧米に留学できないから日本へ来ると言われていた東北３県の出身者も、現在では北京市・上海市・香港といった大都市出身者と同様に高い家賃を支払う財力を持っていることも判明した。留学生は全世界的に「苦学生」から「富裕層」へとシフトしつつあることが明らかとなり、住宅計画に関してもこうした変化に対応する必要があると思われた。しかし経済力や生活様式に差が大きいのもアジア系、特に

中国人留学生の特徴であり、今後はさらにきめ細かな調査が必要である。

留学生の異文化理解度調査においては、自由記述や自由描画を用いて詳細に調べた結果、民族・国籍や日本に関する予備知識よりも、実地体験により理解が大幅に深まることが明らかになった。また学生の作品からは、伝統的建築や庭園のデザインが、それそのものを目的とするのではなく、現代社会や海外にも応用できるコンセプトとして学ぶことが可能であり、かつ有意義なテーマとして認識されていることも確認できた。

外国人の間での日本の伝統建築や和式の生活への高い評価や、そこまで積極的な評価ではなくとも狭い空間を有効活用するために和室や和式の生活が着目されていたことから、日本家屋の既存リソースの有効活用できないかと考えた。この可能性について検証するため、文化財等の古い住宅から調査を行ったところ、所有者らが抱える問題点つまり有効活用への障害が明らかになった。さらにそこで聴取された内容を確認するための 563 名の一般市民に対するアンケート調査を行った。その結果、文化財や日本の伝統的建築空間に対する一般市民の理解度と傾向が明らかになり、今後の教育や啓蒙活動の必要性が示唆された。この中では特に、国家財政も含めた経済的な負担について恐れている人が多いこと、しかし文化財を含む伝統建築が環境共生に役立つことを知った後には興味を増してもらえることがわかった。

これらの調査結果から、伝統建築の維持保存と環境教育を相互作用的に発展させ、それを日本留学の魅力づくりに繋げていく可能性が示唆された。

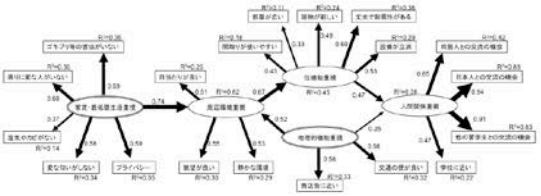

図1　住宅嗜好における各因子間の関連

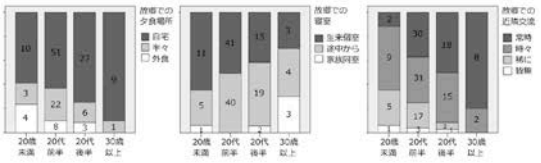

図2　中国における生活習慣の変化

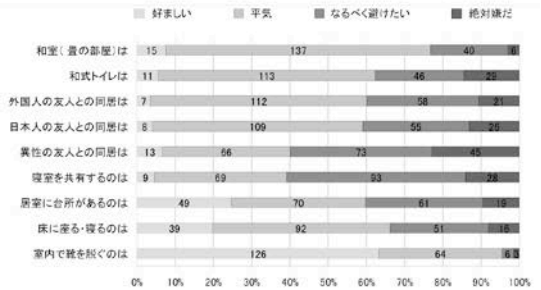

図3　留学生の日本の住宅への適応状況

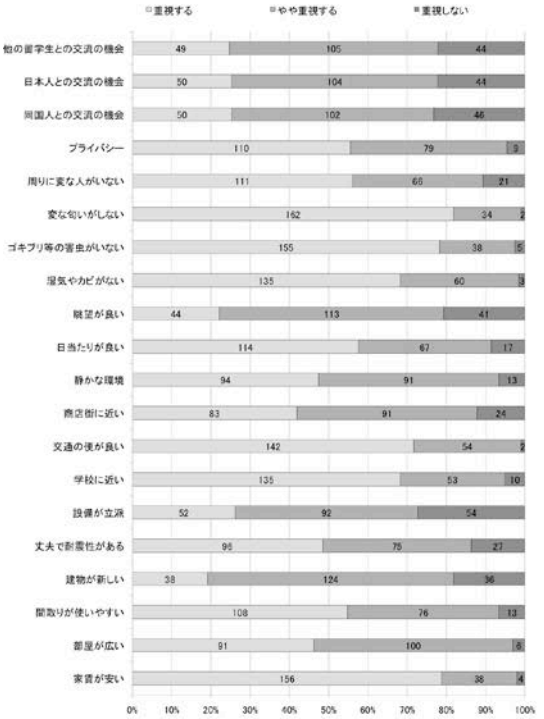

図4　留学生が日本の住宅に求めるもの

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

1. 鈴木あるの　河合淳子　田中みさ子　鈴木克彦、留学生の住宅嗜好とその背景に関する研究 -中国人留学生の動向に着目して-
日本建築学会計画系論文集，査読有，第78巻第686号，745-754pp.，2013.4　DOI http://dx.doi.org/10.3130/aija.78.745

2. SUZUKI, Arno, Cross Cultural Education in Architecture: Findings from Teaching International Students Traditional Japanese Architecture and Gardens, *Selected Papers of the 2nd International Conference on Archi-Cultural Translations through the Silk Road (iaSU2012)*, 査読有，175-183pp.，2013.3（2012.7.14-15）

3. 鈴木あるの　伝統文化教育における日本人学生と外国人学生の比較
留学生教育，査読有，第17号 107-114pp.，2012.12

4. SUZUKI, Arno, 'Open' Social Housing To Accommodate Diversity: A Case Study of The University Village Albany, California, USA, Before The Redevelopment, *The 18th Open Building International Conference (OBI2012) Proceedings*, 査読有，608-617pp.，Beijing, China, 2012.11.19-22(21)

5. 鈴木あるの　歴史的環境デザインの実用的応用-学生の作品および感想文からの考察-
日本建築学会建築教育研究論文報告集，査読有，第12号 29-33pp.，2012.11

6. 鈴木在乃、河合淳子、関西圏国立大学留学生の住環境実態調査、留学生交流・指導研究、査読有、第14号、2012.3

7. 田中みさ子、「大学生の住居観－住宅双六に見る若者にとっての終の棲家－」　大阪産業大学人間環境学論集、査読有、第11号、　75－88pp.　ISSN 1347-2135、2012.3

8. 鈴木在乃、河合淳子、田中みさ子、鈴木克彦、留学生の住宅嗜好とその背景：質問紙調査から、日本建築学会住宅系研究報告会論文集、査読有、第6号、247-254pp.、2011.12

9. 鈴木在乃　田中みさ子
留学生の住宅および生活意識調査その1
日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集、査読無、2011 F-1, 1449-1451pp. 2011.8

10. 田中みさ子　鈴木在乃
留学生の住宅及び生活意識調査その2
日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集、査読無、2011 F-1, 1451-1452pp. 2011.8

11. 鈴木あるの、日本の大学における留学生宿舎提供の現状と課題、日本建築学会大会（北陸）学術講演梗概集、査読無、2010 F-1、1521-1522pp. 2010.9

〔学会発表〕（計９件）

1. 鈴木あるの，アジアの住居に見られる近代化・均質化の功罪，第一回アジア未来会議 2013年03月09日,タイ・バンコック

2. SUZUKI, Arno, Recognitions of the Vernacular Architecture by Local People in Japan: A Case Study of Fujioka Residence, Nara City, The International Conference on East Asian Architectural Culture (EAAC 2012), 2012年12月10日，香港中文大学、中国

3. SUZUKI, Arno, Mixed Results of Technological Advancement in Asian Architecture – Anticipated Effects on Tourism and The Community, The 9th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA2012), 2012年10月22日，韓国・光州

4. 鈴木あるの，伝統的建築・庭園教育における予備知識の影響 ―日本人学生と外国人学生の比較から―，日本建築学会大会(東海)学術講演，2012年09月13日，名古屋大学

5. SUZUKI Arno, Cross Cultural Education in Architecture: Findings from Teaching International Students

Traditional Japanese Architecture and Gardens, the 2nd International Conference on Archi-Cultural Translations through the Silk Road (iaSU2012), 2012年07月14日, 武庫川女子大学

6. 鈴木あるの, 重要文化財住宅所有者の生活と保存活用に向けての問題点: 奈良市藤岡家住宅を中心とする事例研究, 日本民俗建築学会大会, 2012年05月19日、宮城大学

7. 鈴木在乃　田中みさ子
留学生の住宅および生活意識調査その1
日本建築学会大会（関東）2011 年 8 月 24 日、早稲田大学

8. 田中みさ子　鈴木在乃
留学生の住宅及び生活意識調査その２
日本建築学会大会（関東）2011 年 8 月 24 日、早稲田大学

9. 鈴木あるの、日本の大学における留学生宿舎提供の現状と課題、日本建築学会北陸大会 2010 年９月、富山大学

〔図書〕（計１件）
「留学生ハウジング・マニュアル（仮題)」執筆中

〔その他〕 ホームページ作成中

６．研究組織

(1)研究代表者
鈴木在乃（SUZUKI ARNO）
京都大学・大学院理学研究科・講師
研究者番号：20467442

(2)研究分担者
田中みさ子（TANAKA MISAKO）
大阪産業大学・人間環境学部・准教授
研究者番号：30340615

河合淳子（KAWAI JUNKO）
京都大学・国際交流センター・准教授
研究者番号：70303922

(3)連携研究者
大東祥孝（OHIGASHI YOSHITAKA）
京都大学・国際交流センター・教授（当時）
研究者番号：90169053
（退職のため河合淳子に交代）

末松和子（SUEMATSU KAZUKO）
東北大学・経済学研究科・准教授
研究者番号：20374887

山口敬太（YAMAGUCHI KEITA）
京都大学・工学系研究科・助教
研究者番号：80565531